

## 存在理由・存在価値

疫学研究部長



山本 孝史

YAMAMOTO, Koshi

独立行政法人化されて2年、動物衛生研究所内に限って言えばおおむね良い方向に動いていると実感しています。国際学会への参加が容易になったこと、物品の納入が迅速化されたこと等は研究者にとって大変ありがたいことです。もっとも今までが研究所にあるまじき状態であったのであり、やっと大学や民間研究所に近づきつつあるといえなくもないのですが、ともあれ結構なことです。一方、気がかりなこともあります。それは昨年からは実施された評価制度に関連したことなのですが、論文さえ書いていれば良いという考え方をするヒトが増えてくるのではないかと危惧せざるをえない萌芽のようなものを感じるようになってきました。誤解のないようにお断りしておきますが、私がここで言おうとしているのは、7月号で理事が指摘されていたデータの使い回しといったことではなく、ましてやデータの盗用・捏造といわれても仕方のないような低次元の話でもありません。このような話は問題外です。そうではなく、真剣に研究に取り組んでいるヒトのその取り組み方について感じるところがあるのです。動物衛生研究所に求められているのは、畜産を獣医学的側面から支える調査研究であり技術開発であるはずで、ですから論文になりさえすれば良いのではなく、その中身が問われなければなりません。また、税金を使い、研究費は限られているのですから、やるべき優先順位がいつも念頭になければなりません。このようなことをくどくどと言うよりは、当研究所とそこで働く自己の「存在理由・存在価値」を常に考えようといった方が良いかも知れません。すべては「存在理由・存在価値」にあるからです。研究職に限らず全てのヒトが、「自分の所属する組織に国民は何を期待しているのだろうか、自分は何に対して給料を貰っているのだろうか」ということを常に自問し自己の行動規範にしていれば、自ずとやるべきことは決まってくる

はずで、ヒトは安定を求め、保守的なものです。できれば面倒な新しいことはやりたくないと考えがちです。しかし研究所の、さらにその研究所で働いている自分の「存在理由・存在価値」は何かと常に考えていたら、やりたくなくても「やらねばならない」と考えられるはずで、横並びなどという護送船団方式的な思考とは無縁になるはずで、

当研究所は、家畜衛生試験場の時代から、家畜疾病の診断、予防・防遏に関する研究を実施してきました。そしてその最終出口は診断液、診断技術、ワクチン等、獣医療のツールであり、豚コレラ等多くの急性伝染病に対して輝かしい業績を挙げて来ましたが、しかし昨今の疾病は、感染症にしてもその原因は単一ではなく、多くの病原体が関与した多重感染症で、その発症要因には環境要因や飼養管理に起因した宿主の易感染性があります。このような疾病の防除策を確立するには、従来の微生物学、免疫学、病理学的なアプローチだけでは不十分であることは誰も概念的には理解しているものの、組織の枠にとらわれたり、抜本的な組織改編には多大なエネルギーを要することから、これまで研究戦略の練り直しに真剣には取り組んで来なかったように思います。しかしながらわが研究所の「存在理由・存在価値」を考えれば、その時期に来ていると私は考えます。また従来、当研究所は、畜産の生産形態には口を差し挟まずに黙々と火を消すことに徹して来ましたが、しかし米国では、衛生の立場から SEW（隔離早期離乳）という豚の飼養形態が創出されたように、これからは生産形態に対しても提言できることは積極的に提言して行かねばならないと考えます。それも動物衛生研究所の「存在理由・存在価値」の一つであり、動物衛生研究所で働く研究職員の責務と考えるからです。